

4. 防災へのかかわり

これまで、地質技術者としてかかわってきたことから学習したことは多岐の領域に亘っています。特に、防災という領域は、さまざまな視点から取り組む必要があり、一言で言えば最適解が無いようなもので、対象が広すぎるというか暮らしと直結していることだけに複雑化していることを強く感じます。そのため、防災は割り切って限られた条件設定の中でしか満足してもらえないのか、などの葛藤の連續のようにも思われます。災害の現場では、常になぜ予知できなかったのか、事前にすべきことがあったのではないか、復旧することで安全と安定が保障できるのかなどさまざまなことが去来します。

防災というのは、災害に対してどう対応するのかということで、受身的な行為のようにも思われます。とにかく命を守るために、避難する方法や事前に兆候を知ることに注力する以外に手は無いとも思われます。

しかし、それでは何かわからないが速球をとにかく打ち返せといわれるようなもので、数打てばいつかは当たるかもしれません、それでは野球が上達することはないだろし、関心もなくなるような気がします。理想は日常的に対応していることが防災になっているということで、防犯や防火という身近なことになるのが望ましいわけで、いかに日常化するかが大事なことになります。「君子危きに近寄らず」ということは、リスクを避けると同時に危ういところをつくらないことでもあると思います。

(1) なぜ、自然災害が発生するのか

そもそも人間は自然環境のなかで生きている動物で、はじめは自然災害というような考えはなかったような気がします。自然現象の一部ということでそれと共生するような暮らし方が出来ていたように思われます。その間には犠牲もあったかもしれません、学習しながら暮らすことでやがては定住することに至ったものと考えられます。しかしその後、人間の生活環境が高度化して機能や利便性が優先されて来ると、人も身動きが出来なくなってきて、自然現象という外力をまともに受けてしまうことになっていきます。

自然災害は人間社会のあり方とも深く関係しているように思われます。しかし、被害が大きくなるような自然災害は、そう頻度が高くないということもあって、普段の生活で備えるということもせずに、突発的な現象に対応できなかつたことが大きな犠牲につながったものと思われます。そして、そのようなことがあっても、やがてその

経験は風化してしまって、同じようなことがあたかも始めてかのように次の災害を経験するということになっています。

災害は多様で、いつ来るかはわからないものではありますが、どこに何が起きやすいかということは概ね把握できますので、少なくとも危険の度合いを見出すことはある程度可能になってきています。これらは災害の予測というものではありませんが、リスクの特定というレベルではこれまでの経験や地形地質の特性を加味しながら進展しており、今後はデータ×A Iなどの情報処理が進めばより確かな方向で警報が出せるようになると思います。

自然災害は人がいて、インフラがあって、多くの財産が集中している中で、その集中について新たな考え方をしていけば被害を最小にし、余計な出費をしないで安定した生活環境を維持継続できる可能性があるのかもしれません。